

悠久の国・インドを旅して

楠 達也

お釈迦様は、この日(二〇一四年二月十八日)のために、それまでずっと私に声をかけて下さっていたのではなかったかと感じます。それは十七年前、島原市安養寺御住職(当時)・菊池文喬師より、「インドに行かん?」と声をかけられたことに始まりました。「一度はお釈迦様の国・インドに!」と思ってみても実現はなかなか難しい。夢のまた夢でした。

菊池師にさそわれ、ふと「行くか」という気が起こりましたが、「寺内・家族の猛反対をうけるのではないかと心配していたら、「行ってくれば」との思いも寄らない坊守の言葉に驚きと喜びに心が弾みました。それからこの度二〇一四年二月、インド仏舎利安置報告。昭和二十九



祇園精舎の鐘

年(一九五四)インド・ネール首相から長崎市へ原爆追悼と平和を念じてと仏舎利を送られてからの六十年。その仏舎利は、いろんな時代の流れに流されてご安置ができません。やつと六十年経ってこの仏舎利は、平和公園内の原子爆弾無縁死没者追悼記念堂にご安置することとなりました。仏舎利安置法要では、田上長崎市長、高見カトリック長崎大司教、野下神父、長崎県宗教者懇話会の諸師、仏教連合会諸僧、一般門信徒の多くの方々の参列のもと、当時仏

現実のインドは、貧困と現代科学が同時進行しているように思われま

す。悠久の国・インドといわれますが、まさしく時間を越え、空間を越えてすべて悠々と流れている。それが、インドという国でした。お釈迦様のお心もそこで生まれ、仏教をあきらかにし、現代の私達に目覚めることを願って下さっているようです。

話はつきませんが、インドの小学校を訪れたら、我々の終戦直後の小学校と同じように机もノートもエンピツも無い中で、三掃依をとまえ、ヒマラヤの山々に合掌している子ども達の姿があり、その子どもの中から世界の先端をいくコンピューター等を扱う、優秀な人材が続々と出現して世界をリードしていくのです。

「インドって、不思議な国だなあ。」と思うと、「南無不可思議光」とお念仏が自然に称えられます。

インドを旅し、インドに出遇うと人間が自己革命を起こすのではないのでしょうか。

革命を起こした人、それは仏様かな?

拝めば花の上にも仏あり
拝めば月の上にも仏あり

まさしく、いつでもどこでも仏様に、お釈迦様に出遇える国がインドでした。

最後に皆様に「ブッダの言葉」をお届けしたいと思います。

すべての者は 暴力におびえ、すべての者は 死を恐れる。

己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。

すべての者は 暴力におびえる。

すべての生きものにとって 生命は愛しい。

己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ

実にこの世においては、怨みに報いるに怨みをもってしたならば、ついに怨みのやむことがない。怨みを捨ててこそやむ。これは永遠の真理である。

(前光源寺住職)

教連合会長を務めさせていただいたご縁で導師を仰せつかり、有難いかりでした。

それ以降、毎月九日には仏教連合会諸寺賛同のもと、原爆追悼と平和を念じての参拝をお勤めいただくこととなり、「念ずれば花開く」とはこの事かと思わずにはおれません。「すべて十年」といいますが、最初の声より十数年過ぎてその意味がいただけました。

思えば、二〇〇一年・二〇〇三年・二〇〇六年・二〇〇七年・二〇〇八年・二〇一〇年、そして二〇一四年と七回のインド訪問は、すべての日の為の用意だったのでしょうか。

七回の訪問で、お釈迦様の歩みにそって、誕生の地・ネパールのルンビニ、悟りの地・ブッダ・ガヤ、初転法輪の地・サルナート、入滅の地・クシナガラ、祇園精舎、王舎城、ナーランダ大学跡、霊鷲山等々の仏跡を参拝しました。

又、長崎県宗教者懇話会とのご縁で仏跡参拝とアルカッタのマザー・テレサの教会。そして、南インド・ゴアのザビエルの教会をも訪ねる機会に恵まれて、キリスト教の伝来や歴史文化など多くのことを教えていただき、神父様との同室でのホテル宿泊は、お互いの交流・理解をさらに深めたことでした。

観光では、ヒマラヤ遊覧飛行で世界の屋根と呼ばれるヒマラヤ山脈の雄姿にふれ、ヒンドゥー教徒のガンジス河での葬送の儀式。永遠なるへいのちへの還帰としての散骨の姿が、五木寛之著『大河の一滴』の意味を体感でき、古歌「雨アラレ 姿かたちは違えども流れは同じ谷川の水」の一句も同じであったと共感できました。

インドへと旅を重ねる度に、どんどん世界が豊かに広くなり、生きること・死んでいくことすべてが大いなるへいのちのいとなみの働きの世界であったと身にしみて学び育てられていきました。

風信

二月の行事と言えば三日の「節分」に始まる。旧暦をみると、この節分の日 は十二月二十五日であり、旧正月の元日は二月八日と記してある。そして、節分の翌日は「立春」と記してあった。すると今年も旧正月の前に春が来ることになる。その昔、古今和歌集巻頭の紀貫之の和歌に次のものがあつた。今年と同じような年であつたのであろう。

年のうに春はきにけり この年を こそ(去年)とやいはん 來年とやいはん

○江戸時代の長崎の「節分」の風習については野口文龍の『長崎歳時記』(長崎

県史・史料編四)を読まれるとよい。

○一六〇三年ナガサキCollegeより出版されたVocabulario (日蘭辞書・岩波書店刊)にも次の語が収録されている。

Xebun 時をわかつ意。genios (異教徒)が Voni・すなわち悪魔に「外

家の中に投げて、悪魔を追い出す儀式を行う年の末。

正しい語はXechibun。Nayarai: Vonyarai

○子供の頃、節分の日には、戸口に鯛の頭を搦した小枝をさし、夕方には家中を真暗にして雨戸を開けて豆をまき、一人は手に杓文字を持ち「もつともだ、もつともだ」と言つて後より付いて廻らされていた。そして、晩ごはんにはカナガシラと「鬼の手」という赤大根を食べ、門の外に「火吹竹」を投げ、近くの伊勢ノ宮の「御火焼」に行つて「厄よけ」に尻をあぶつて帰つた事を思い出す。当時の節分の夜は、街に三味線の音が流れ実には賑やかだった。

○二月五日午後三時より長崎歴史文化博物館主催・開館十周年記念特別展として「我が名は鶴亭」の花鳥画の開会式・内覧会あり出席。(展覧会は三月

二七日まで)鶴亭は長崎南頻派熊斐の門下にて京都を中心に活躍した画人。

○二月十八日、午後五時よりオランダ文化遺産庁長官来崎。出島内外クラブにて日蘭文化交流の講演会あり。

○二月二十五日、長崎日本ポルトガル協会本年度総会を午後二時半より長崎グラバービルにて開催、柿森和年氏の「世界遺産について」の記念講演会あり。

○今月ご寄贈頂いた書籍
宮川雅一氏より『ながさき2つの世界遺産を歩く
旅』美しい観光案内集を受贈。脇田・菊森両先生
協力の説明文あり。楽しく拝見させて戴いた。(発行
行ノンブル・千円)

長崎歴史文化協会研究室

TEL八二二一五四〇
十八銀行公会堂前出張所2F

